

## 最前線に立つ人

サムエル記下 15:30~37

ヤコブの手紙 1:12

今、ダビデは頭を覆い、はだしでオリブ山の坂道を泣きながら上って行きます。

打ち砕かれた心と体で、涙を流しながら坂を上って行きます。悲しみと恥の姿です。同行した兵士たちも皆、それぞれ頭を覆い、泣きながら上って行きました。涙にまみれた坂道です。ダビデの息子アブサロムの反逆に襲われ、急いで逃げていくダビデ一行の姿です。イスラエルの王が、それも自分の息子に追われて逃げていく惨めな姿になっているのです。

それに追い打ちをかけるように、今までダビデに忠誠を尽くしていた有能な軍の指揮官アヒトフェルがアブサロムの軍に加わったという知らせを聞きます。

しかし、その絶望的な状況の中で、ダビデは「主よ、アヒトフェルの助言を愚かなものにしてください」と神様に祈っています。心の底から祈りながら、その苦しみの中でも冷静にどのようにすべきかを指示しています。苦しみを共にしようとするアルキ人フシャイにアブサロムのところに戻り、どのようにしてほしいかを語っています。

息子アブサロムはイスラエルの兵士を全員率いてすでにエルサレムに入城し、父上の側女のところに入る恥辱の行為を行います。これは父ダビデとの対決を公に宣言するもので、自分がイスラエルの王であることを誇示するものでした。

そして、逃げていく父ダビデを殺すために軍の長官たちと長老たちを呼んで戦略を立てるのです。そのとき、アヒトフェルは言います。「一万二千の兵を私に選ばせてください。今夜のうちに出発してダビデを追跡します。疲れて力を失っているところを急襲すれば、彼は恐れ、彼に従っている兵士も全員逃げ出すでしょう。私は王一人を討ち取ります。」そうすれば兵士たちを連れ戻すことができるし、平和になるということでした。その通りダビデの一行はあまりの疲れでヨルダン川を渡ることもできず留まっている状態でした。そして、15章17節からを見ると、亡命者の身分を持っていた大勢の外国人と子供さえ同行していたのです。戻るように勧めるダビデに「主は生きておられ、わが主君、王も生きておられる。生きるも死ぬも王のおいでになるところが僕のいるべきところですよ」と言いながらダビデに従った人たちでした。ダビデ王だけが殺されると他の人たちは力がなく降伏するしかないのです。

そのようなダビデの状況をよく知っていた、アヒトフェルの戦略は優れたものでした。そこにいた人たちもそれに賛成をしました。しかし、なぜかアブサロムはそれに満足しないで、フシャイも呼ぶのです。フシャイはその場にいなかったようです。アブサロムによって呼び出され、アヒトフェルの計画を聞くことになります。フシャイはダビデの息子アブサロムにも深い信頼を得ていたようです。父ダビデに対するフシャイの忠誠心とその能力を高く評価していたのです。父上にお仕えしたようにあなたにお仕えしますと言った、フシャイの言葉をそのとおりに信じ込んでいました。

フシャイは、アヒトフェルが提案したことはよいとは思いません、と言いながら17章に書いてありますが、ダビデがいかにも勇敢で戦術に優れているのかを話します。もし下手に追いかけて失敗すればアブサロムの兵士は弱気になるのだと長たらしく語ります。それで多くの兵士を率いてアブサロム自身が出るようにと勧めます。この話は、実は、ダビデに逃れる時間を与えるためでした。アブサロムの英雄心理を刺激する幼稚であって現実的な話ではなかったのです。しかし、アブサロムと長老たちはフシャイの話に引かれ、優れたアヒトフェルの提案を捨ててフシャイの戦略を取るようになるのです。

フシャイは密かに人を送り、そのような状況をダビデに伝えます。そして、早くヨルダン川を渡っていくように伝えます。優れた戦略を言い出したアヒトフェルは自分の提案が捨てられたのを見て、アブサロムの敗北を感じたようで、絶望して自殺をします(17:23)。彼の予想とおり、ダビデは勝利

し、アブサロムは殺されてしまうのです。

17章14節にこのように書かれてあります。「アヒトフェルの優れた提案が捨てられ、アブサロムに災いが降ることを主が定められたからである。」

戦略会議の場にはいないフシャイをアブサロムが呼び出すようにしたのもその背後で働いてくださった神様でした。アヒトフェルの賢明な作戦を捨てて幼稚で空想的なフシャイの戦略が受け入れられたのは神様の御導きによるものでした。

そして、神様の御導きを信じて、王ダビデを守るために、敵陣に入り込んで戦ってくれた人たちがいたのです。敵たちの前で堂々と偽りの戦略を語ったフシャイ、ばれたら命さえ危ないところでした。また、敵陣を通して行ってダビデにその知らせを伝えたアヒマアツとヨナタン、それに協力してくれた祭司ツアドクとアビアタル、そして、アヒマアツとヨナタンを隠して、追いかけて来たアブサロムの部下にここを通り過ぎて川のほうに行ったと賢く言ってくれた女の人、緊急で殺伐な状況の中でダビデのために働いてくれた人たちの冷静な行動は冷汗を流すほど緊迫感を与えてくれます。

ばれると命さえ失うところで、その人たちの命かけのこのような行動はなぜであったのでしょうか。それは、ダビデの多くの欠点にもかかわらず、神様がダビデを選び、彼とともにおられることを知っていたからでした。ダビデという人物が重要ではありません。主が共におられることを知っていたからでした。そのように主の御導きを信じて、最前線で戦ってくれた人たちがいたのです。この人たちの勇敢な行動がなかったならば、ダビデは自分の息子アブサロムに敗北し、惨めな最後を迎えたのは確かなことでしょう。

ダビデは平凡な家庭の羊飼いの末息子として生まれましたが、神様に選ばれ、イスラエルの王になりました。ダビデは何よりも鋭い靈感が与えられ、神様を深く信頼していました。王の身分であるにもかかわらず神様の前では子供のようにへりくだった姿勢をもっていました。霊的な分別力と弱者を憐れむ心を持っていました。しかし、深刻な過ちを何度も犯したのです。瞬間的な欲望に捕えられ、結果を考えず、犯した罪もありました。

サムエル記上21章(参考22:11～)を見ると、ダビデは嘘をつくことによって多くの人が殺され、また、自分の身の安全のために罪なき者の血を流し、特に他人の妻を犯し、それを隠すためにその夫を殺す卑劣な行為までしたのです。また、子どもたちとの関係も決して幸せではない、自分の息子によって殺されそうな辛い思いをした人です。彼は波乱万丈の激動の人生を送った人でした。

しかし、多くの欠点を持っていたダビデでしたけれども、神様は「私の心に適う者」と呼びかけ、ダビデの子孫から救い主が現れることを約束してくださったのです。ダビデは自分を選んでくださった神様を愛し、過ちはあったものの、その罪が指摘されると、すぐその罪を認め、真心で悔い改める人でした。神様の助けと恵みのもとであります。自分が犯した罪と行為にたいする責任と代価を払わなければならなかったのです。

そのようなダビデが王として守られ、神様の御心に適う生活ができたのは、ともにいる人たちの献身的な支えがあったからでした。各自おかれた役割は違うが、心をつにして最前線で戦いながら助けてくれた人たちがいたからでした。各々の役割は違うが、主のために働くということに一致していたのです。ダビデ一人ではできなかった、かえって、王ダビデよりも主の前で大きな使命を全うした人たちがいたのです。

神の国と義を求めながら福音を述べ伝えることはこの世との戦いです。

使徒ペトロは言います。「身を慎んで目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。信仰にしっかり踏みとどまって、悪魔に抵抗しなさい。あなたがたと信仰を同じくする兄弟たちも、この世で同じ苦しみに遭っているのです。・・・(ペトロ5:8, 9)」

私たちは同じ信仰、同じ志をもって、主のために最前線に立っているのです。ときには試練を耐え忍びながら、命の冠を頂くために、共に戦っていくのです。そのような私たちと主が共におられます。